研究雑話（75）
人間発達の物質的基礎（三九）：論議（一〇）、問題の所在、付点八分音符での相互引き込み。

藤井力夫

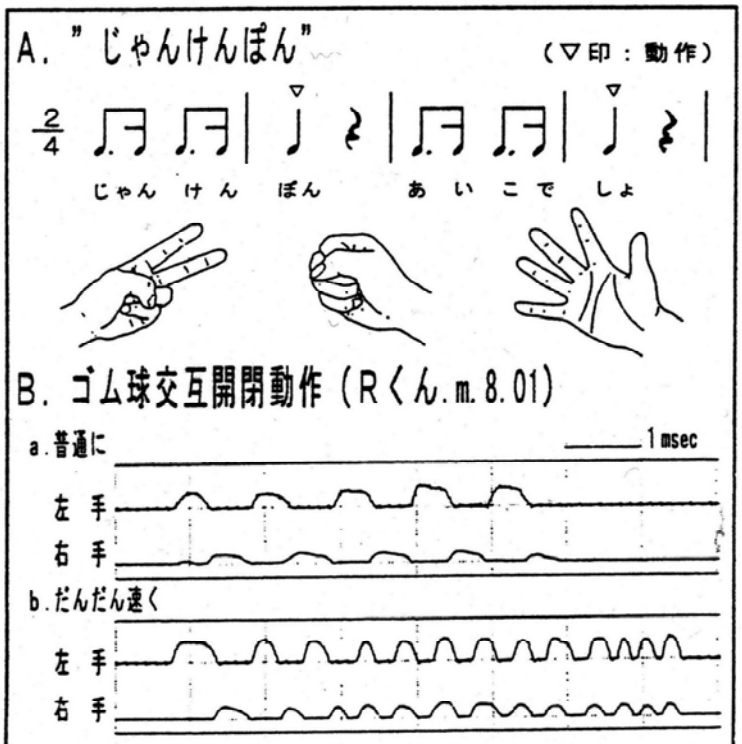
前回は、視空間メモにおける「基底線」の描出についてお話しました。地面や海面などの「基底線」の描出は、垂線を引かせ、上下、左右から交点、そして向きのある世界へと導きます。これは向きの違いを一目で理解することを可能にし、読み書きや加法の学習の基礎となります。たとえば、菱形模写でも、運筆が左右別なら、向きの違いを認識した描出で、文字学習が可能です。残念ながらRくんは「基底線」や、「裏拍」を利用できず、情報処理としてはとても不利な状況にあります。どう立ち戻るか、今回は、もう一つの問題、他者との関係を強めるリズム、付点八分音符の存在についてお話したいと思います。「わたしはわたしをどうしたいのか」。これぬきに「基底線」も「裏拍」も利用できないからです。

図Aは、「じゃんけんぽん」のリズム譜：／じゃん．けん／ぽん．◎／あい．こで／しょ．◎／。「じゃ」と「ん」、「け」と「ん」の拍節の表拍と裏拍の関係が、付点八分音符と一六分音符の三対一の関係。簡単に思えますが、「じゃんけん」は実際には五歳になってからで、六歳をまたなければ自由にはなりません。付点八分音符による相互引き付けが、手がかりを提供し、他者との関係で何を出すか、微妙な判断を可能にします。Rくんは、遅れた感じで、握りも明確ではありません。

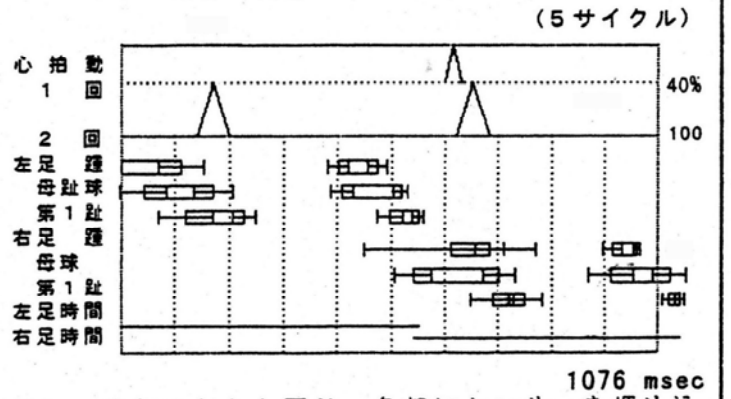
図B、交互開閉動作の安定と速さ調節：なによりも自分のリズム、好きな速さの安定が大事です。これなしにスピード調節はできません。図はRくんの交互開閉動作。左右不安定ですが、八回程度の持続。八分音符の速さです。だんだん速くすると重畳反応。動作が安定し、スピード調節できれば、手の働きも意味で分化できるとされます。じゃんけん動作の背景として、見事な対応です。

図C、付点八分音符はスキップのリズム：四分音符は歩行、八分音符は走。走動作の安定が付点八分を可能にし、それがスキップへと転化させます。図はRくんのスキップ動作。各部平均値による足蹠パターン。五サイクルの持続。母趾球部でなんとか誘発。不安定ながらも付点八分音符と一六音符によることが了解できます。Rくんのスキップは、発達段階三から四への移行期（雑話六九）。両腕持ち上げから、前腕回外位保持によるスキップ動作に移ろうとしています（雑話七一）。「じゃんけん」と「スキップ動作」。身体動作のレベルで、他者との共同を受け入れ、自己のものとして他者を同期できることを示しています。付点八分音符の貢献です。

（北海道教育大学教授）



注）、血圧測定で使用される検出に接続して把握圧を支えるゴム球部を空気圧変換器に接続という掛け声で、だんだん速くする圧力の交回程度（約2Hz）。普通とも強い。から重畳反応。左手から開始、把握圧を8回程度の持続。八分音符の速さ。だんだん速くすると重畳反応。動作が安定し、スピード調節できれば、手の働きも意味で分化できるとされます。じゃんけん動作の背景として、見事な対応です。



注）、歩行のときと同じ、各部にセンサーを埋め込んだシューズを履き、腰部のメモーリ装置（煙草1箱大）で記録。動作の連続した5サイクルをパソコン解析した。1サイクル＝1076msec、左足ホップ時間＝593msec、右足ホップ時間＝549msec。右足母趾球部の接床は長く、心拍動は右足母趾球部ホップ時に引き寄せられている。